

ドクター・ハザマの



# バイタルサイン塾 9

## 専門性の認識とチーム医療での活かし方

ファルメディコ株式会社  
 大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座  
 医師・医学博士 狭間 研至

### あなたはすでに 薬剤師の専門性に気づいているか？

薬剤師は、自分の専門性に気がつきにくい状況に置かれてきたのではないかと、思います。少し過激な例えで恐縮ですが、「死体は戦場に隠せ」という言葉を聞いたことがあります。どんなに突出した大変なもの（死体）も、それらがたくさんある場所（戦場）にあるのであれば、ほとんどその存在は見えなくなってしまうということです。

薬剤師は、チーム医療への参画という他の医療従事者にとっては当然のことを、改めて意識しなければならないのが現状ではないかと感じていますが、その背景には、薬剤師が薬局・薬剤部の中で薬剤師のみのコミュニケーション、仕事のあり方を形作ってきたことがあるのではないのでしょうか。

薬剤師は、私が申し上げるまでもなく、化学に軸足を置いた極めて専門性の高い職種です。しかし、薬剤師ばかりの中で仕事をしていくと、まさに、先ほどの過激な例えではないですが、薬剤師の専門性は認識しづらくなってきます。

しかし、近年、病棟や在宅業務などで他の医療職種との連携が始まってきた中で、自分の専門性に気がつかれている薬剤師も徐々に増えてきているのではないかと思います。つまり、「私が当たり前と思っていることが、医師や看護師にとっては当たり前ではないのか!？」というごく当たりの気づきです。

### 薬剤師の専門性とは 「「薬剤師ならではの」の評価」にこそある

薬剤師の専門性を医療チームの他のメンバーに伝える一番良い方法は、患者さんの状態や治療に対する薬剤師としての評価（アセスメント）を、「薬剤師なら

では」の視点からきちんと伝えることです。

「薬剤師ならではの」というポイントはたくさんあると思いますが、私は特に「薬理学」、「薬物動態学」、「製剤学」の知識ではないかと思っています。

医師の専門性は、「診断学」と「治療学」にあると思います。つまり、お腹が痛いといって診察室に訪れた人には、何が原因となっていてその症状を解決するためにはどういう治療が必要かということを考えます。「正しい診断なくして正しい治療なし」ですから、診断は極めて重要です。治療法についても、昨今ではEBM (Evidence Based Medicine) が浸透する中でさまざまな治療ガイドラインが出されているので、その up to date も医師にとっては重要です。その治療の中には外科治療もあれば薬物治療もあります。がんであれば放射線治療もあるわけですが、最も受ける頻度が高い治療が薬物治療ですから、医師の多くは自らの専門性である「薬物治療」をよく勉強します。しかし、これは診断－治療という流れの中で出てくる「薬物治療」であり、その重きは「薬剤の選択」というところにあります。

一方、薬剤師は、その薬剤（化学物質）が実際に体内に投与されるときに、どのような機序で作用をし、どのような経路で吸収・分布・代謝・排泄が起こるのかを理解するだけでなく、どのような剤形がベストかということも含めて理解できているはずで、この理論的背景をもって、目の前の患者さんの状態を評価していれば、その評価内容は医師・看護師だけでは得られないものです。

薬剤師にとってバイタルサインを理解し、活用するということは、医療チームの中で、医師・看護師とは異なる「薬剤師ならではの」評価を下し、その結果を共有することができるということです。このことは、必ず患者さんの治療効果や医療の質を高めます。ここにチーム医療に薬剤師が積極的に参画する意義があるわけです。